
カース

世良

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カース

【Nコード】

N7177Z

【作者名】

世良

【あらすじ】

親友サチの亡くなった横断歩道で男に出会った。そして私は——死んだ。

プロローグ1

サチが居なくなった、サチは私の親友で、幼稚園のころからずっと仲が良かった。あまりに仲が良いので「まるで姉妹みたいね」なんてことを両親に言われたことがあるほどだ。同じ小学校を通い、同じ中学校にも通った。小学校でも中学校でもこの友情は変わらない。

いつも一緒、一緒になれる機会がある時ならいつでも。でも中学3年の春。本日、5月3日サチは居なくなってしまった。

今でも信じられない。

昨日まで「また明日ね！」って言ったのに、明日になっても会うことは無かった。居なくなったのは下校途中で別れてすぐだったと言う話だ。いつも別れる場所から自転車です3分もかからない横断歩道。普段は車の通日も少なく、事故なんてほとんど起きない、そんな場所で亡くなったらしい。

死因は知らない、教えてもらっていない。事故だったのか、それとも最近噂になっていた通り魔だったのか。でも何もできなかった自分が一番悔しい。もしもあの時、私が向こうに言っていれば助かったかもしれないの！

あの時、サチは体調が悪そうにしていたように感じた。もしかしたらそれが原因で何かあったのかも知れない。

だとしたら、私は、私は。

9月、夏が過ぎて木の葉の色が変わり始めて秋を感じさせる。今年の夏休みは夏季講習で潰れ、終わると学校。この秋を越え、冬が来ると受験が始まる。

憂鬱な気分のまま今日も学校へ。

「おはよー、亜美」

「おはよ」

友達の恵理が肩叩いて挨拶。私は出来る限りの声で返事した。

「元気ないねー、夏期講習のせい？」

「それもあるけど他にも色々」

「なんか大変そうだねー、あつ先生が来た」同時にチャイムが鳴る。もうサチがこの学校から居なくなつて4か月経つ。みんな受験勉強に忙しくて必死に勉強している。当然私も例外ではない。

夏休みに入る前は皆気にしていたけど今はその話題には誰も触れようとはしない。皆忙しいのか、それとも忘れてしまったのか。

最近変な夢を見るようになった。最初ははつきりとしなかったんだけど、成績のことで親と揉め始めてからそれが鮮明になってきた気がする。その光景ではいつもサチと下校する時に別れるT字路。私は右でサチは左。その左右の別れ道を左に少し進んだ所にある横断歩道の上をうろろするだけ。それ以上は何もない。一度誰かがここを通つてて出会った時、私の顔を見るなり逃げていったような記憶がある。

今日下校ついで行つてみようかな。昨日まで夏期講習でそんな場合じゃなかったし。

退屈な授業、もう教科書の内容は終わっていてどの授業も復習ばかり。午後4時、下校時間になったので適当に友達と別れの挨拶をして自転車を漕ぎ出した。

あそこだ、コンクリートの壁とアスファルトの道路に囲まれたこの道。目の前に左右に別れる道が現れてくる。

いつもは右に曲がるけど今日は左に曲がる。そこから少し進むと横断歩道が見えた。人通りは無く静か。聞こえるのは風の音くらいだ。

横断歩道を通つたそばに花束が置かれていた。一緒にお菓子やジュース置かれている。

親にはここで亡くなっただけとは言われた。サチの両親にもそう言われた。でも詳しいことは教えてもらっていない。

自転車を傍に止め、しゃがんでボーッとそれを見続ける。話によると事故としか教えてもらっていない。どのようなことがここで起こったのか、誰も教えてくれなかった。

「お前は、甲本幸の知り合いか？」

後ろからいきなり男の声がした。全身がビクッとして鳥肌が立つ。息が苦しく、動悸が激しい。

ゆっくりと呼吸をしながら後ろを向くと見覚えのない男性が立って居た。灰色のコートを着た長身の男。凄く怪しい、そんな人。だけど彼はサチの名前を知っている。甲本幸、サチの名前を。

何かを知っている？ 大きく深呼吸をして息を整えて答えた。

「はい。そうです。同じ中学の友達です」

「中学、なるほど。そう言えば16時頃に終わると聞いていたな。ふむ」

口に手を当てながらこちらをじろじろと見てくる。明らかに何かを探っているのが見てとれた。

「何か？」

「いや、最近変な夢を見なかったか？」

「変な、ですか。どんな夢ですか？」

夢、確かに見たけどすぐには答えなかった。見た目のせいかな、明らかに怪しくて信じられなかったからだと思う。

「……いや、何でもなし。変なことを聞いてしまったな」

一礼して帰って行った。何だったんだろう、あの人は。

プロローグ2

またこの夢だ。まるで古い映画のようにノイズの入った映像。見えるのは暗い道路と足元には白い線。

私は何をしているんだろう。こんな所を歩いて、何を。

突然映画で聞いたことのあるような銃声が、凄い音で全身に痺れとひどい頭痛が走った。目の前に白線が目の前に飛び込んでくる。どうやらこけたらしい、立ち上がるかと手を使う、そして足で地面を踏もうとしたが出来なかった。

なぜか分からずそちらに視線を向けると右足が無くなっていた。

そこに痛みは無い、代わりに頭痛が針で刺すように痛む。

地面を這いずりながら動いていると足音が近づいているのが分かった。近づくにつれて恐怖心が募って体動かせなくなった。唯一動かせる首をゆつくりと動かして後ろを見る。

あなたは、さっきの――

「キヤーっ?! はあ、はあ。今の、なに？」

今、撃たれた。地面を引きずりながら動いている私に向けて、頭に銃口を。それよりもその相手が、何者？

現在午前3時、吐き出しそうなほど心音が激しく鼓動している。数分、深呼吸を続ける。落ちついてきたけど代わりに喉が渴いていることが分かってきた。音を立てないように静かに台所へ向かい、コップに水を汲む。

「……う、ん。ふう、さて寝よう」

喉が潤うと気分が少し落ちついた。欠伸を漏らしながら部屋に向かってベッドに潜り込んだ。しかし横になるとさっきの映像が頭の中に流れた。おかげで心音が高鳴る。全然気持ちが悪く落ちつかない。眠れない。

その日は明かりを付けて布団に潜り込んだままで夜が明けてしまった。

いつものように学校。気分はいつもよりも悪い。とりあえず、眠い。

行くのが嫌で母さんに駄々をこねてみたけど「受験が近いんだから行きなさい！」と怒鳴られたのでしょうがなく通学した。学校に着いてからも凄く体がだるくて、持っている鞆がいつもより重く感じて辛い。

「おはよー、亜美」

「おはよ」

いつものように恵理が肩叩いて挨拶。昨日よりも低い声で返事した。

「なんか今日は昨日よりもひどいねー」

「うーん、色々あってね」

「ま、まあ調子崩したら言ってねー？」

戸惑いながら恵美は言うと離れて行った。

眠たい、けど寝たらまたあの映像が襲って来そうで眠れない。けど体調は良くない、休むように机に顔を突っ伏せた。

それから前と同じように復習や対策ばかりの授業。自習もそこそこあったが特に何かするわけでもなくただ寝たふりをしていただけだった。

そんな調子ですつと鬱々として過ごす。気づけば下校時間、今日学校で何してたんだろう。

前かごに鞆を乗せて漕ぎ出す、数分こぎ続けるとあの丁字路まで来てしまった。

さて、どうしようか。

嫌な予感しかしないのに、でも昨日の夢のことが気になってしょうがない。

Ｔ字路を左へ曲がって奥へ、横断歩道が見えてきた。それと一緒に見たことのあるコート姿の男が立っている。男を見ると同時に夢の映像が流れた。

やばい、怖い。もしかして私を待っていたの？

ブレーキを引き、反転する。向こうはこちらに気づいて走ってきてるのが一瞬見えた。私は目一杯ペダルに体重をかけて無我夢中でこぎ出す。

立ちこぎで、今まで出したことのないような速度で道を駆け抜ける。ある程度走って所で後ろを見たが姿は無かった。

逃げ、きれた？

肩で息をしながら確かめるように自問自答する。

良かった、もう追ってきて居ない、なんて安心している場合じゃなかった。

気づいた時には遅かった。目の前に信号待ちをしている車が、ブレーキを握るが間に合わない。結局、抵抗むなしく激突した。

「い、いたたっ」

ぶつかると体が一瞬前に飛ばされそうになり、鼻や口から何かが飛び出そうな感覚がした。幸いブレーキのおかげで少し失速していてこける程度で済んだ。こけた時に右腕を擦ったみたいでそこが少し破けていた。

「おっおい大丈夫か？」

優しいような初老の男が車から出てきてこちらの心配をしている。

自転車は前輪が走ることが出来ないことが分かるくらいに曲がっていた。向こうの車はタイヤの形に少しへこんでいる。

「あっ、はい。だ、大丈夫です」

「そうか、良かった。でもこれは……ひどいねえ」

自転車とぶつかった跡を交互に見ながら言う。

「す、すいません！ 急いでて、それで」

「とりあえず電話番号を――」

男がそう言いながら車の中へ入っていく。車のアイドリング音だけだったはずなのに、後ろからやけに響く靴音が、まさかと思って後ろを向くとコートの男が近くまで来ていた。

「キヤーっ！」

思わず声を上げる、そして立ち上がり無我夢中で走り出す。

「ちょ、ちよつと、待ちなさい！」

「行くな！ まだそっちは――」

二人の男の止める声が聞こえる。

止まれるものが、止まったら殺される。でも、叫び声は私が思っていたのと違った意味を含んでいたのことに気づかなかった。

ぶつかった車の横を走り抜け、そのまま道路へ。同時に左の方から大きな音がする。この音って――

私は死んだ

気づくと横になっていた。ベッドの上で、傍にはコートの男が立っていてこちらを見ている。男に気づくと同時にビクツとさせて襲われないように腕を縮ませていると「起きたか」と、言つと男の声と同時に傍で軋む音が聞こえた。

腕を下ろし、腰を上げて男と同じようにベッドに座りこの場所を。前を見れば男が見えて、その後ろには入口だと思ふ扉がある。上を見れば綺麗な照明、左に視線を向けると枕と傍に小さな照明、反対側には机と鏡、その隣にはテレビがあつた。誰かの部屋と言つよりはホテルの一室と言ふ感じ。

「ここは、どこ？」

「すまなかつた、私のせいだ——」

男は質問に答えることなく謝り続ける。意味が分らず聞くと説明を始めた。

「17時24分に亡くなった。信号無視で——」

そこから先の内容は頭に入つてこなかつた。代わりにここに来る直前のことが頭の中を渦巻いてくる。

この男から逃げようとして無我夢中で走つた先。あそこは信号のある交差点で、直前に見たのはいつもと感じが違う大きなトラック。遠目で見るとは何も感じなかつたのに、今想像できるのは強大で凶悪な別の何かで……

「——おい、大丈夫か」

肩の揺らされる感覚と男の声で現実に戻された。同時に今の私が現実でどうなったのか、この男が言っていることが本当だったと言ふことも。

「とりあえずしばらく休んでおけ。お前が今どうなっているのかは追々説明する」

男の声に力なく頷いた。

私は今『ホテル松尾』というビジネスホテルの一室で男と居る。男の名前はマキシムというそうだ。名前からして多分外人、だけど喋る言葉に違和感はない。

「何か聞きたいことはあるか？」名前と今居る場所を教えてもらうと聞いてくる。

聞きたいこと、正直、今は何もやる気がでない。いきなり死んだと告げられて、気分が上がる人なんていないか。

「何にもない」

気分が悪い時に出る低い声で答えておいた。

「明日、外に出るがどこか行きたい所はあるか？ 無ければ仕事場に行くが」

「考えとく」と、さつきと同じ声で、何も考えず答える。

時刻は午後１１時。いつもならそろそろ寝ようかと考える時間。でもあまり眠気は襲ってこない。私はつまらないニュースを見て、男はずっと銃をいじっていた。その銃には見覚えがある。夢の中で撃った銃。何をしているか分からないけど、多分整備をしているのだと思う。

「ねえ、夢でその銃で撃たれるのをみたんだけど。何だったの？」
小さな金属音を立てながら銃をいじっていた手を休め、喋り始めた。

「それはお前のカースの映像だ」

「カース？」

「そうだ。呪い、と言えば少しだけ分かりやすいかもしれない」
「呪いってホラー映画とかにある、呪い？」

何度かテレビで放映されていた映画で見たことがある。その人を恨み、恨まれた人は様々な不幸に遭って、死んだりすることが多かった気がする。

「そうだな。まれにいるんだ、呪いを持った人が。私たちはそれを倒し、そしてそれについて研究することを仕事としている」

「研究しているのに倒すの？」

「元となった人と出会つと、恐ろしい事が起こるからな。倒した後
は元となった人を連れていくのが主な仕事だつたんだが、な」

言いにくそうに語尾を濁す。困つたように男は半笑いになつて
いた。私もつられて半笑い。だってこの話が本当なら私は殺された
んじゃないくて……

私は顔に手を当てて屈んだ。恥ずかしいのもあるし、あほらしく
て笑つてしまいそうな自分もある。状況を飲み込みたくない自分が
ここにいることだけは理解した。ベッドにもぐりこんでいると小さ
な金属音が再び聞こえる。他に何も音は聞こえなかった。

私の知りたいこと

「おい、亜美。起きろ」

声が聞こえる。耳触りに思いながら目を開けた。見回すと自分の部屋じゃない。枕元にあった時計を見ると10時を指していた。

「遅刻?!」

「寝ぼけてるんじゃない」

冷静に突っ込んできた。そうだよ、もう学校に行く必要はないんだ。

「起きたか?」

黙りこんでいたせいか、屈みながら聞いてくる。その顔は眉を眉間に寄せて心配そうに見える。

「うん」

出せる限りの元気の良い声を出した。男は「じゃあ行くぞ」と、言いながら部屋の入口の方へ歩き出した。

ホテルを出ると男はどこかへ行こうとしている。

「ちよつと! 行きたい所があるんだけど」

「ん? ああ、そうか。じゃあ先にそちらへ行こうか」

昨日『考えとく』って言ったのに、忘れてる? ムツと来たけど行くことを優先しないよね。

歩いて数分、慣れた道を通り一日ぶりの自宅。木造二階建ての古めかしい家。いつもなら気軽に中に入るんだけど、今日は別の家みたいに感じて入口まで行けない。もう見える所まで来たのに、足が動いてくれない。

「どうしたんだ、亜美。用事があつてきたんだろ?」

「分かつてる、分かつてるけど」

立ち止っていると手を掴まれ、そのまま家の前まで連れて行かれた。入口まで来るとドアの傍に合ったインターホンを押した。

「ちょ、ちよつと何して——」

扉が開かれた。中からはお母さんが、でも今まで見たこと無い表情をしている。いつもは怒っているような表情で、それでも頼りがいのある、そんな母が弱々しい。それをみて一瞬、息苦しくなった、気がする。

「ど、どちら様でしょうか」

「こちらは近藤さんのお宅でしょうか」

「い、いえ、こちらは木城ですが——」

戸惑っているお母さん。マキシムはワケの分からない言い訳をしながらこちらに目配せをしている。なんとなくそれが意味していることが分かった。少しだけ扉を開いて中に入る。

見慣れた廊下、奥へ行つて居間に。高さの低いテーブルにお父さんが座っていた。色々な書類が散らばっていて、手紙のようなものをずつと書いている。一枚一枚丁寧に、内容を覗くと見たことのある親戚の名前と難しい文章。なんとなくだけそれを意味していることは、分かった気がする。

後ろから足音が聞こえる。振り向くとお母さんが戻ってきていた。お父さんの方をまた見るとお父さんもお母さんに気づいて振り向いていて話します。

「誰だっただい？」と、お父さんは言う。

「さあ、分からないけど間違いだつたみたい。それよりそっちの方はどう？」と、お母さんは言った。

「ああ、この通りさ」と、お父さんは答える。表わすように山積みの手紙を指さした。

「そうね」と、お母さんは言った。そして続けて「亜美は、どうして」と言いかけて言葉は途切れた。

「悔やんでもしょうがない。もう、居ないんだ」そう言うと二人は寄り添った。私を挟んでいるのに、二人とも私が居ることは気づきもしない。

「ここにいろよ」と、言つても振り向きすらしてくれない。やっぱ

り、ダメなんだ。

自分の部屋に向かった。二階の一室、小学校に入って勉強部屋を作ってもらったが一人で寝るのが嫌でよくごねていた記憶がある。いつの間に二階の部屋にも慣れて、それも無くなった。入ると何一つ変わらない部屋が広がっていた。クローゼットの中も、置かれている小物も何一つ変わってはいなかった。変わらない部屋にほっとした。机の中も何一つ変わっていない。中にはいつも使っていた日記があった。鍵付きの日記。これだけでも持っていこう。

筆箱と日記帳を持って出ようとすると足音が聞こえる。思わず隅に隠れていると出てきたのは母だった。しばらく見回して不思議そうに首をひねると扉を閉める。

耳を澄ましと下から「どうだった」と父の声、「気のせいだったみたい」と返す母の声が聞こえる。

どうやら気づかれては無かったみたい。何で隠れてしまったのだろう。やましいことなんて何も、無いはずなのに。どうせ見えない、なら堂々としていれば良い……のに。

日記の一枚を千切って、ちよつとした事を書いてみる。書いたことは『ごめんなさい』でも何か違う気がして『ありがと』と、書き換えて机の中に入れておいた。

「もういいのか？」

家から出ると聞いてくる。頷くと男は歩き始めた。向かう場所はどこかは知らない。

「ねえ、聞きたいことがあるの」

「なんだ？」

足を止めることなく返事をしてくれた。私は一番聞きたいことを聞く。色々あって忘れかけていたことを。

「どうして、サチのことを知っていたの」

足を止めた、でもすぐに歩きそのまま答える。

「何のことだ」

「とぼけないで！ 横断歩道で会った時に聞いてきたじゃない」

男は私の叱責に微動だにせず、声の調子を変えずに話す。

「知ってどうする」

「どうするって、聞いちゃだめなの」

「分かった。私は彼女が死ぬ前に一度会った。それだけだ」

諦めたように答える。でも私にはそれがすべてとは思えなかった。

だけど私に深く聞く勇氣は無かったのだと思う。

「本当に？」

ただそれだけ聞いた。ほんの少し希望を持たせて。

「本当だ」

男はそれだけ答えると歩く速さが少し上げた。

面接

それから駅に行き、何駅か向こうの所へ行くこととなった。普段使わないからどこかまでは分からない。男は切符をちゃんと買い、私はお金を払わず中へ乗り込んだ。揺られる電車の中、男は一言も話さずじつと前を向いたまま動かない。周りを見回しても誰も居ない、元々人の少ない所だから。

「日記読んでいい？」

「持ってきたのか、良いぞ」

周りを見回しながら男は言う。その言葉を聞いて私は日記を開き見てみる。

懐かしい記憶。始めたのは中学生になった時に買ってもらってから。それから何日か書いてたけど続かなくて。読んでみると四日くらいで日付が大きく変わっている。それからサチが私の家に遊びに来た時にこれを見つけて、それでまた始めた、それがこの日付。

それから何日かおきに書いている。今年の5月で日記は終わっていた。最後の内容で理由は分かっている。今の私にはこれが必要だから、だからこれを持ってきたんだ。

筆箱からシャーペンを出して書いていく。今日のこと、私が亡くなったこと、そしてこの男と一緒にいること。あったことをみんな書き留めていく、忘れないように。

いつまでも電車に乗ったまま。日記も書くことが思いつかないから退屈になった。

「これからどこへ行くの？」

「私の仕事場だ、次で着くぞ」

「仕事場？」

男は声色を少し低くして話し続ける。

「これから、色々面倒なことになるかもしれない」

「面倒って、何？」

「まあ、着けば分かる。大丈夫、信用してくれ」

「だったらサチのことを教えてよ」

「それは無理だ」と、断られると同時にアナウンスが鳴った。

改札を抜け、駅から出た。周りはビルが立ち並んでいて地元よりも都会。この町には何回は来た事がある。駅から少し行った所にある映画館やショッピングモールがあつて、とても便利な所だ。

思い出しつつ見回しているとスーツの男性が一人寄ってきた。

「マキシム様ですね、付いて来てもらいますよ」

「ああ」

マキシムの返事と共にスーツの男に枷のようなものを腕に付けられ、日記が地面に落ちてしまった。

「ちょ、ちよつと！ 何よこれ！」

「あなたが木城亜美ですね。暴れるのなら大人しくして頂きます」
その言葉に圧力を感じて言い返すことが出来ずにそのまま引きさがり、言われた通り大人しく連れて行かれた。

「日記は持つておく」

ずっと日記の方を見ていたらマキシムが拾ってポケットに入れた。この男は捕まって無いんだ。やっぱりはめられたのかな。怒りよりも諦めの方が強い。段々とうでもよくなってきた。どうあがいても、私にはどうしようもない、そんな気持ちが強くなっているのが分かってくる。

駅から歩いて数分、周りは高い建物が立ち並ぶビル街。その一つの建物の前に止まった。入口の所に『天使ヒルズ』と書かれている。「では中へどうぞ」と、スーツの男は淡淡と言って中へ連れられた。中に入ると広いフロアが広がっていた。ホテルのような広いフロア、右側にはテレビやソファは、左側の壁は階段とエレベーターがあつた。スーツの男の先導でエレベーターに乗る。中に入ると最

上階の13階のボタンが押された。数秒して到着のチャイムが鳴り、扉が開かれる。開いた先は廊下が続き、その先に扉があった。

「では中へどうぞ」と、さっきと変わらない声で案内される。

中は廊下が広がっていた。5メートルほど先に扉、途中にも右側、左側にそれぞれ一つずつ扉がある。スリッパに履き替え、奥へと進む。

途中の右側の扉で立ち止まると「こちらへどうぞ」と、言って扉が開けられ、私とマキシムは中へ入った。中は凄く簡素な部屋が広がっていた。テーブルとイス以外の家具は一切無くて、窓すら無い凄く不気味な部屋。マキシムは何も言わずにイスに座ったのでその横に座った。反対側にはイスが一つ、その向こうには扉がある。

「ねえ、何が始まるの？」

「面接のようなものだ。気楽にやってくればいい」

一分もしないうちに正面の扉から人が出てきた。顔に黒いマスクを被っていて表情は読めない。服装は体の曲線が分かるほどピチピチの黒いスーツ。そんな不気味な人が対面してすわる。

「それでは、木城亜美の処遇についての会議を始めます」

抑揚のない機械のような声でこの面接のようなものが始まった。「彼女には強力なカースが宿っていたとの報告が上がっています。そのため、研究への提出の要請がきておりま——」

話を最後まで聞くことなく男が声を上げた。

「彼女は私が共闘者にする」

「それはつまり木城亜美をマキシム様の共闘者となることでよろしいですね」

「ああ、そうだ」

「ですがあなたはまだ共闘者を得る枠が得られておりません」

その言葉に対抗するように男が書類のようなもの机の上に出した。黒スーツの人はそれを手にとりながら話し始める。

「なるほど、カシュー様の推薦状ですか。わかりました。ですがこちらの有効期限は1年ですのでご注意を。では最後に、彼女の意思

を問います。あなた、木城亜美様はマキシム様との共闘者となることをを誓いますか」

いきなり私に話を振られた。焦ってキョロキョロしていると男はこちらを見てが黙って頷いてくる。つまりこれは、応じると？ 流されるまま了解の返事をした。すると黒スーツの人が淡々と話し始める。

「了承しました。では後ほど木城亜美様にはここでの生活を訓練と言う形でお伝えしますので、それではこれからよろしく願いしますね」

精密な機械のようにきっちり立ち上がり、枷を付けられたまま黒スーツの人と一緒に奥へ行かれた。

私はとても軽率な答えをしてしまったと思う。共闘者とは何なのか分からない、けどこれからのことはどうせ私には分からない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7177z/>

コース

2012年1月9日19時51分発行